

がん教育に関する 当事者の意識調査 (1)

～がんを経験した親の立場から～

小林真理子(放送大学大学院臨床心理学プログラム)

井上実穂(国立病院機構 四国がんセンター)

白石恵子(国立病院機構 九州がんセンター)

小嶋リベカ(国立がん研究センター中央病院)

大沢かおり(東京共済病院/NPO法人Hope Tree 代表)



研究目的

2018年3月9日閣議決定により第3期がん対策推進基本計画において「がん教育の推進」が盛り込まれ、学校におけるがん教育が始まった。

がん教育を実施する際には、がんに罹患した家族を持つ子どもへの配慮が必須である。

本研究では、がんになった親である患者および配偶者を対象としたアンケート調査を行い、がん体験者のがん教育に対する経験や意識を明らかにし、望ましいがん教育について検討することを目的とする。



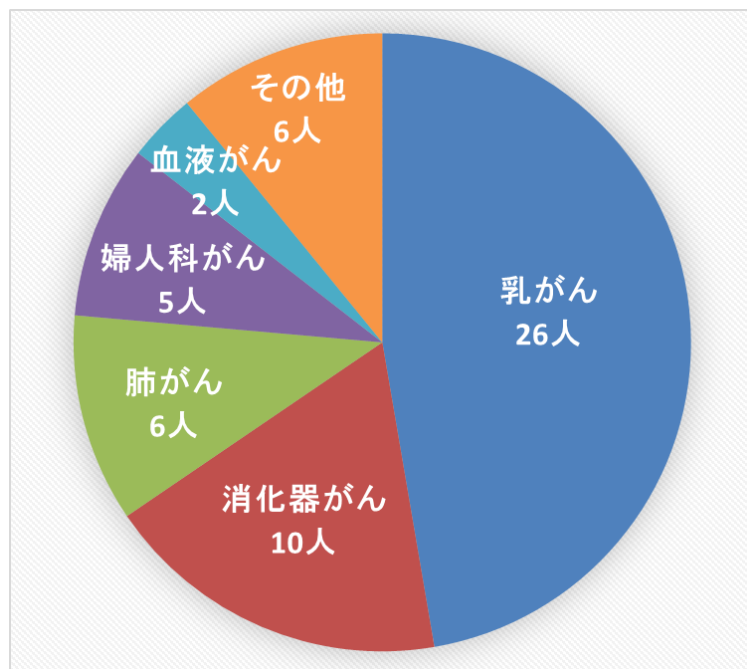
方法

- **調査対象**: 以下の2つの条件を満たす者
 - ①がんと経験した人あるいはその配偶者
 - ②小学4年生から高校生までの子どもを持つ者
- **調査方法**: NPO法人HopeTreeのサイトおよび患者会等を通して募集し、承諾を得て、親用アンケートと子ども用アンケート(小学生版/中高生版)を郵送した。
- **調査期間**: 2020年2月～9月に91通発送し、55通回収した。
(回収率60.4%)
- **調査項目**: <親用> 属性、がん教育に関する意識や配慮について、自由記述を含む17問。
- **倫理的配慮**: 調査は無記名、同意の上で返送していただく。放送大学研究倫理委員会の許可を得て実施した。

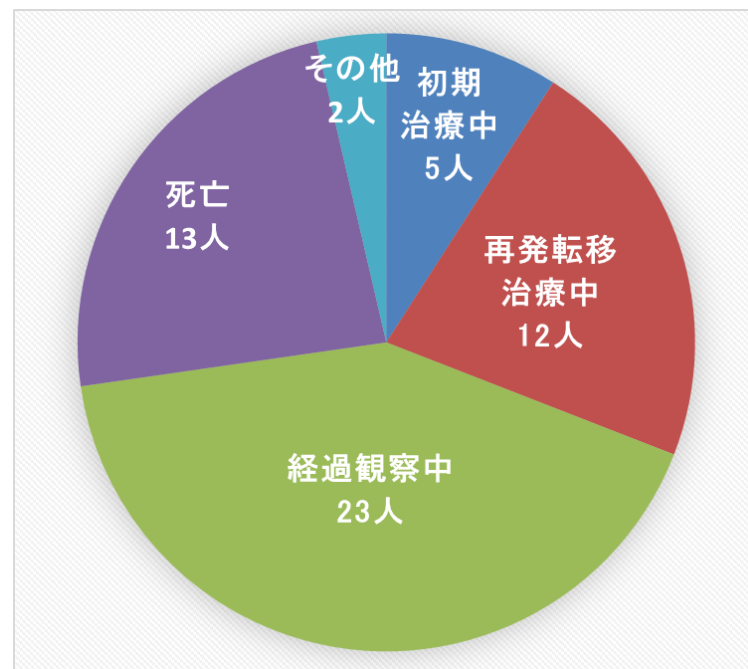


結果 (1) 対象者の属性 (n=55)

- ・〈性別〉 男性7名(12.7%) 女性48名(87.3%)
- ・〈患者の別〉 患者39名(70.9%) 配偶者16名(29.1%)
- ・〈平均年齢〉 47.8(±4.6)歳
- ・〈子どもの人数〉 1人:18名、2人:28名、3人:9名
- ・〈患者のがん種〉



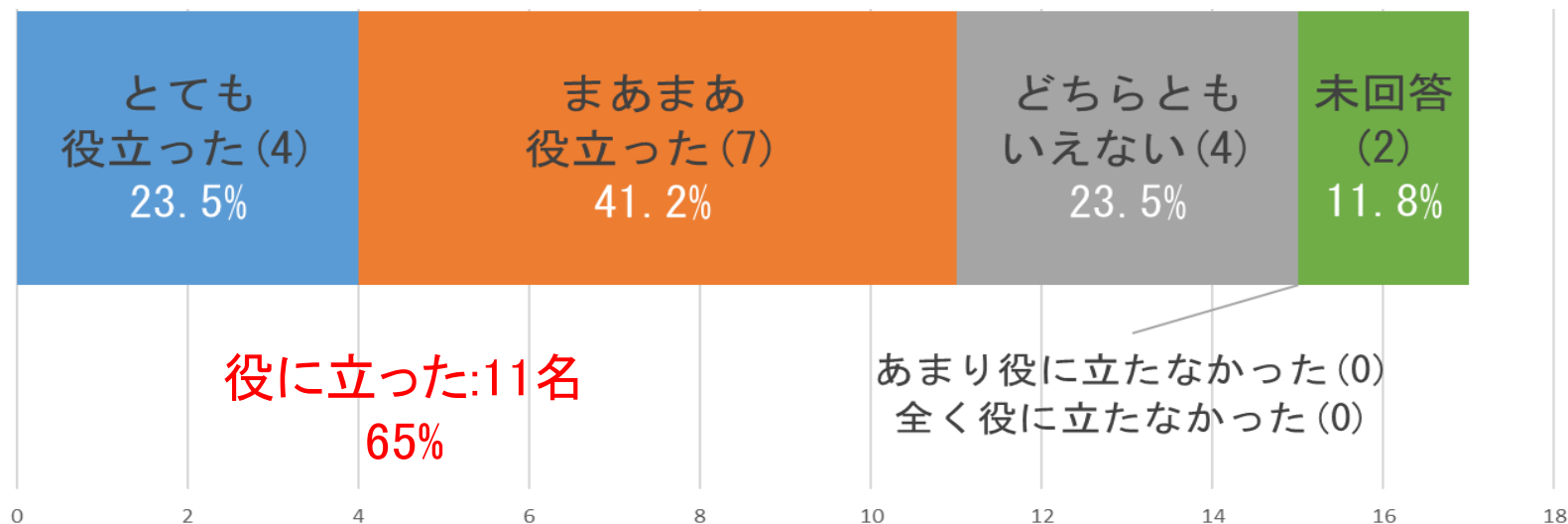
〈患者の病期〉



(2) がん教育の経験 (n=17)

- 〈子どもが「がん教育」の授業を受けた経験〉あり:17名
- 〈①事前・②事後の配慮〉 あり:8名、なし:9名
- 〈配慮の内容〉
 - ①「無理して聞かなくてもよいという説明があった」
「授業前に聞くか、別室で過ごすのか本人の意思を確かめてくれた」
「授業内容についてお知らせが事前にあった」
 - ②「授業後にフォローの電話を担当からもらった」
「子どもの様子を教えてもらえた」
「自宅に電話が来て子どもの様子を聴いてくれた」

・〈がん教育は役に立ったか〉 (n=17)



・〈役に立った理由〉

「子どもの仲間に少しがんという病気の事がわかってもらえた」

「子どもたちに病気に対する理解を与えることができた」

「がんの治療方法など詳しく知ることができ、子どもの不安の解決が図れた」

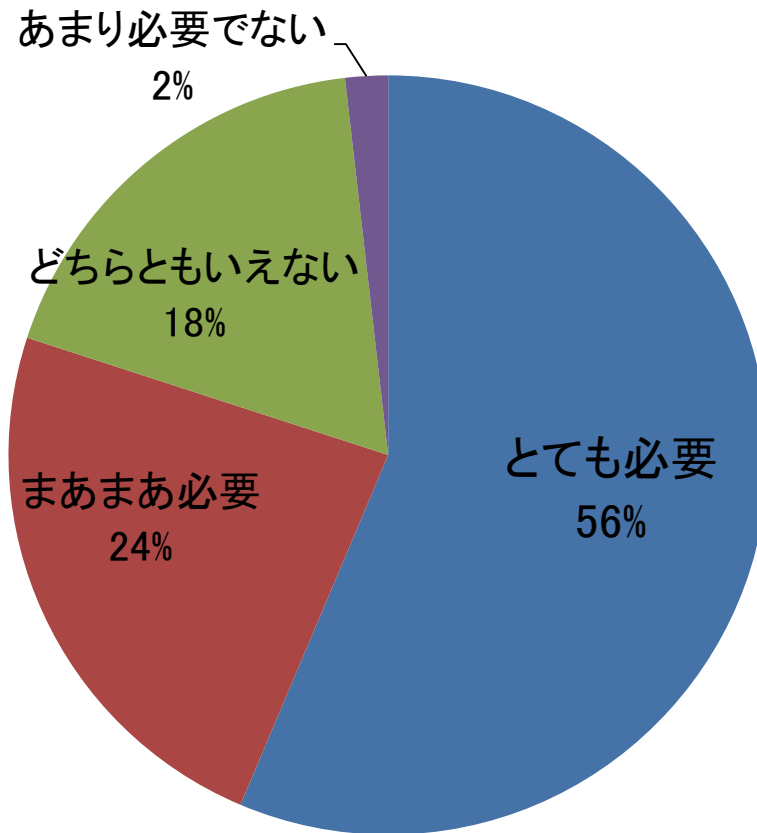
・〈どちらともいえない理由〉

「具体的な内容や教え方など、詳細は不明なため」

「辛い事は封印してきているので、その影響の有無はわからない」

(3) がん教育の必要性 (n=55)

・〈がん教育は必要だと思うか〉



■ とても必要	(31)	44名
■ まあまあ必要	(13)	80%
■ どちらともいえない	(10)	
■ あまり必要でない	(1)	
■ 全く必要でない	(0)	

(4) がん教育の担い手 (n=55)

- 〈誰が教えるのが望ましいか〉(複数回答可)

- ①医療スタッフ:49名

- ②がん体験者:41名

- ③学校教員:16名

- ④その他:4名(チャイルドケア専門家、がん経験のある教員)

- 〈その理由〉

- ①「患者さんを現場でみて関わっているから」

- 「医療専門のスタッフだと心強い」

- ②「体験者が一番わかると思うから」

- 「体験者が医療スタッフと組んだり、サポートしたりする形が良い」

- ③「教員はサポートする形が良い。授業がづらい方もいると思う」

- 「養護教諭が良い」

(5) がん教育を受ける子どもの年齢

・〈がん教育を受けるにふさわしい子どもの年齢・学年〉

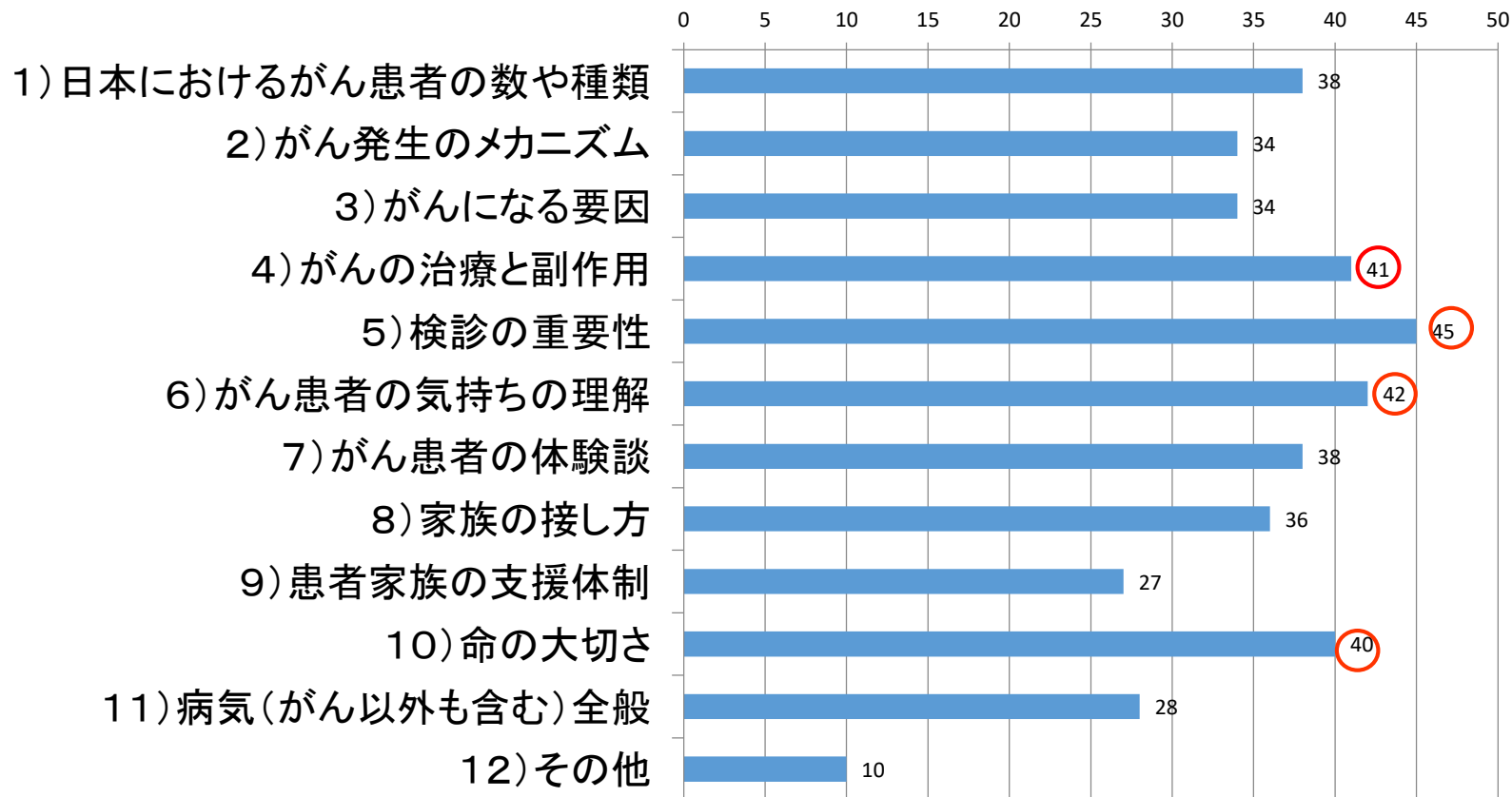
(複数回答可)

- ①1・2年生:16名、②3・4年生:22名、③5・6年生:35名
- ④中学生:37名、⑤高校生:31名

・〈その理由〉

- ① 「若い時期に親が罹患することもあるから」
「誤った情報が入る前に、正しい知識を学べた方が良い」
 - ② 「自分で考えて行動することを意識し始める年齢だと思うので」
「親ががんになった時のことも理解できるから」
 - ③ 「命の大切さ、大事な人を失う気持ちがわかる年代だから」
「内容を正しく理解できる年齢」
 - ④⑤ 「自分に身近なものとしての理解ができる」
「医学的な内容も理解でき、親への思いや病気への関心も増してくる」
- ①～⑤「各年齢によって病気や死に対する視点、関心が変わってくるので」

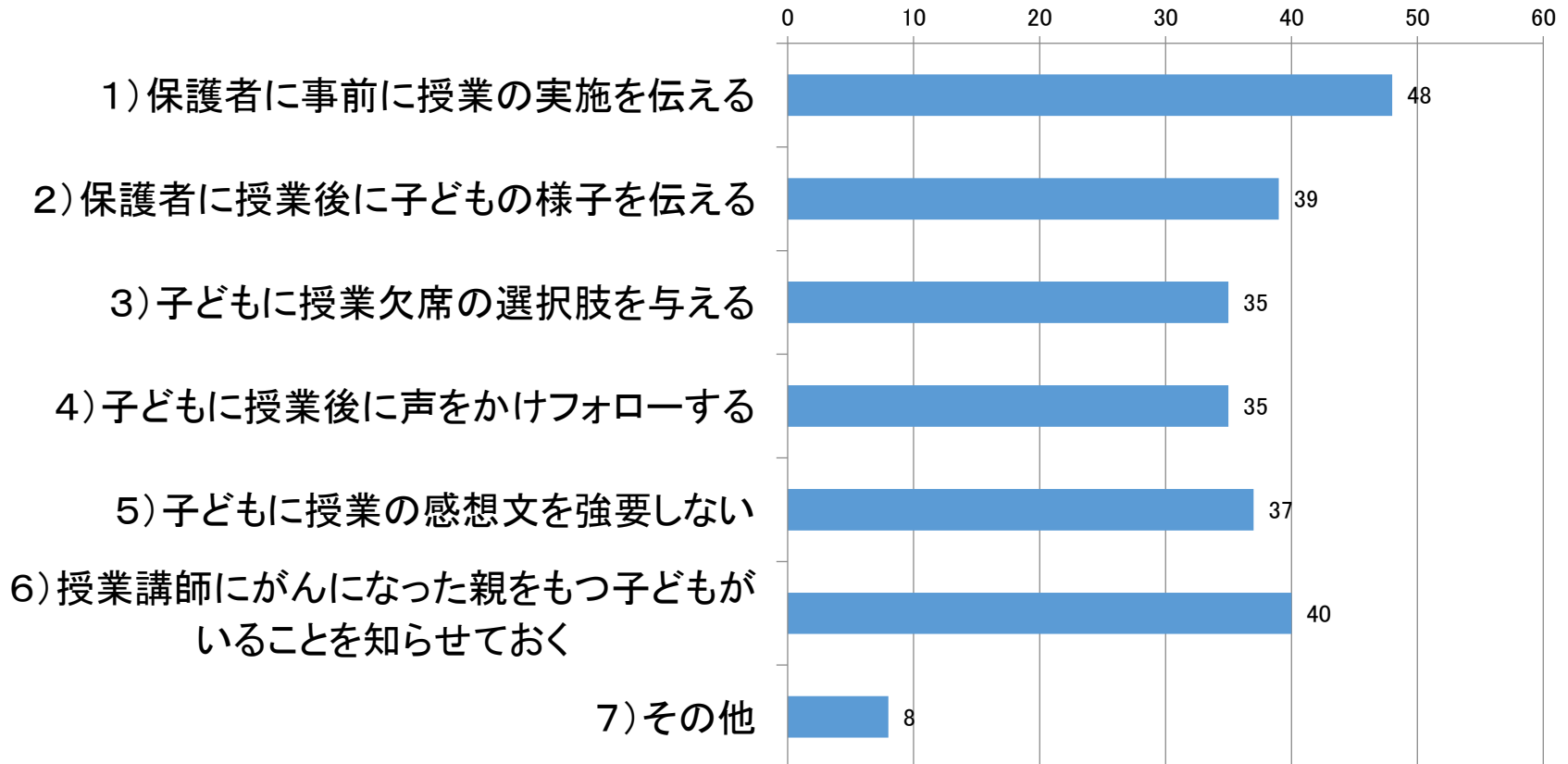
(6) 「がん教育」に必要な内容 (複数回答可)



* その他の内訳(抜粋):

- ・両親を亡くして子どもが残された場合の自分(子)に対する支援と相談先などの情報
- ・自分ががんになった時の行動について
- ・親ががんである子どもたちへ、自分だけではないこと、孤独に寄り添うアプローチ
- ・差別や偏見が絶対いけないということ
- ・マスコミ報道やいわゆる美談とは実際は違うこと

(7) がんの親をもつ子どもへの配慮 (複数回答可)



* その他の内訳(抜粋):

- ・その子の親ががんであるということが、周囲に知られないように事前の打ち合わせが必要
- ・専門家のアプローチの必要性
- ・授業中に対象の子ども様子を気にかけておいていただく
- ・授業前に打ち合わせをし、家族の意思を確認し、フレキシブルに対応
- ・担任の先生以外に、養護の先生等の複数で様子を見る

考 察

がん教育の必要性と配慮

- **がん教育の必要性**: 回答者**55名**のうち、子どもががん教育を受けた人は**17名(30.9%)**で、そのうちの**11名(65%)**が「役立った」と回答した。がん教育の経験に関わらず、当事者である親の**44名(80%)**が、がん教育は必要だと認識していた。
- **実施に当たっての配慮**: 子どもへの配慮があったのは、**8名(47%)**で、丁寧な配慮の下でのがん教育は親に安心をもたらし、親は学校と連携して子どもを守りたいと願っていることが理解された。
- がん教育の主体は学校にある。がん教育の実施に際して、当事者である〈保護者〉と〈子ども〉に対する事前の配慮、外部講師との丁寧な打合せ、事後の継続的な支援の必要性がうかがえた。(詳細については今後発表予定である)



考察 今後のがん教育に向けて

- **がん教育の担い手**: 医療スタッフ(49名)、がん体験者(41名)、学校教員(16名)という回答であり、外部講師として、医療スタッフにも担ってほしいと願っていることが分かった。
- **がん教育の対象**: 小学校低学年から高校生まで、どの時点においても、それぞれの理解力に基づいた段階的ながん教育を望んでいることが理解された。
- **がん教育の内容**: 必要だと思う項目として、①検診の重要性、②がん患者の気持ちの理解、③がんの治療・副作用、④命の大切さ、の順に多く、〈知識〉〈予防〉〈気持ち〉等の多面的な内容を望んでいることが分かった。
- 丁寧な授業マネジメントと個別的配慮のもとになされるがん教育がすべての子どもと家族にとっての糧となることを願う。



第26回日本緩和医療学会学術大会

COI 開示

演題発表内容に関連し、
主発表者及び研究責任者には、
開示すべきCOI関係にある企業等はありません。